青少年地域活動ふるさとを見なおそう　第2集『長門昔ばなし』より

昇竜の穴

むかし蓼科山のふもとに近い山奥の部落にいわな釣りがとくいなおじいさんが住んでいました。今日も朝暗いうちに家をでて、いつものように本沢の霧がふちまでやってきました。

霧がふちは二段になった滝が落下し、周囲の岩にぶつかり霧となり数枚の畳を敷き詰めたような平らな岩のうえに降り大木におおわれ、ものすごいかんじのする所でした。

釣竿をかついだおじいさんは、いつものように本沢の道から霧がふちにはいろうとしました。滝から降りそそぐ霧といっしょに冷たい強風がピューと吹き抜けると、どうしたことかおじいさんの体は釘付にされたようになり、頭の先から足の先まで氷のように冷えきって、ものをいうこともできません。

体が倒れそうになるので両足をふん張ってこらえ、前の方を見ると滝つぼの水面から大きな頭を持ち上げた竜がおじいさんに向かって、大きな口をカァーと開き、冷めたい息を吹きかけていました。

あまりの恐ろしさに顔を両手でおおいその場にうずくまってしまい、気が遠くなり、そのまま、その場に倒れてしまいました。

それからどのくらい過ぎたことでしょうか・・・・・ふと気がついたときは大木の合間から淡い光がさし込んで、滝つぼには虹の橋がかかっていました。恐る恐るあたりを見回しましたが、竜の姿はどこにもありません。

ふしぎなことに、付近の平らな岩に直径三十センチメートル深さ五十センチメートルもあるうず巻きのような穴があいています。

「竜の昇天だ。」思わずおじいさんは大声で叫んでしまいました。

むかしから陽気が良い年は、水中にひそむ竜が天に昇ると伝えられ、そのときにできる穴を「竜ずり」と呼んでいました。竜ずりの穴は大きなもので直径三十センチメートル、小さなものでも十五センチメートル、深さは六十センチメートルから四十五センチメートルでした。こんな穴が七・八個つらなるように平らな岩についています。

竜ずりの穴はお天気を判断し、穴に湿気があるときは雨、乾いているときは晴でした。おじいさんは毎日観察していましたから釣りの名人ばかりでなくお天気博士でとおっていました。「おじいさん今日は雨降らめえない。」と聞きにゆくと、「今日は降りやすぞ。」といって、いつも村人たちにしんせつにお天気を教えてくれましたから、村人たちから、とってもだいじにされました。